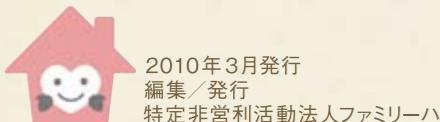


患者家族滞在施設を担う 人材養成・研修事業報告書

患者家族滞在施設を担う人材養成・研修事業報告書

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業

2010年3月



〒101-0031 東京都千代田区東神田2-4-19
TEL : 03-5825-2931
FAX : 03-5825-2935
E-mail : jimukyoku@familyhouse.or.jp
URL : <http://www.familyhouse.or.jp>
イラスト : 江村 信一
デザイン／印刷／製本 : 株式会社 オリコム

特定非営利活動法人ファミリーhaus

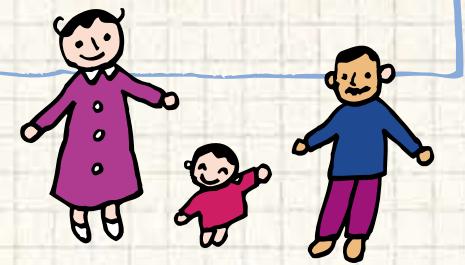
2010年3月
特定非営利活動法人ファミリーhaus

患者家族滞在施設を担う人材養成・研修事業

報告書



2010年3月 特定非営利活動法人ファミリーhaus



はじめに



特定非営利活動法人ファミリー・ハウス
理事長 江口 八千代

「病院近くのわが家」として全国にひろがった患者とその家族の滞在施設（ホスピタル・ホスピタリティ・ハウス）における、運営の質的向上を目指して研修会を開催いたしました。本書は、その報告書です。研修会と報告書の作成にあたっては、平成21年度（2009年度）の独立行政法人福祉医療機構「子育て支援基金」の助成をいただき、「患者家族滞在施設を担う人材養成・研修事業」として実施いたしました。

重い病気と闘っている子どもは10～20万人を超えると言われています。そのうち、自宅から離れた病院で治療が必要な家族には、「病院近くのわが家」としてのハウスが必要になってきます。どの家庭でも子どもが高度医療を必要とする病気になる可能性があります。

こうした家族のために、1990年代前半から、各地でハウスの必要性を感じた人が、ボランティアにハウス活動を始めてきました。1998年と2001年には、厚生労働省によるハウスの建設費補助を受けて、病院が直接運営するハウスも増えました。また近年では、企業がハウス運営に直接参加する形態や、行政・医療機関・NPOの協働によるハウスも増えてきました。現在では約70運営団体が全国でハウスを運営していると言われています。

まだハウスが1つもない都道府県もあり、今後も認知度の向上とハウス開設の動きは全国的に必要です。しかし、その一方で、既存のハウスの質的向上も不可欠です。

ハウスは開設することがゴールではなく、病気の子どもと家族のために役立つよう努力を継続していくことが重要です。運営に関わっている一人一人が試行錯誤をし努力を重ねることで、ハウスの質が保たれていることが多いと感じています。これまで、このようなハウス運営のノウハウを共有化し文章化することは、あまり取り組むことができていませんでした。

そこで、各ハウス運営団体で培われたノウハウを互いに共有し、人材育成に役立てることを目指して、研修会を開催しました。

研修会では、マイク・ア・ウイッシュ オブ ジャパンの大野寿子事務局長をお招きし、ハウス活動にとっても大いに参考になるボランティアコーディネートの取り組みを紹介頂きました。また、分科会では、「ボランティア」「地域連携」「利用者対応」の3つのテーマに分かれて、それぞれのハウス運営団体がこれまでの活動で培ったノウハウを情報交換できました。分科会の実施にあたっては、マイク・ア・ウイッシュ オブ ジャパン東京本部事務局長の大野寿子氏と、千代田区社会福祉協議会地域福祉課長の梅澤 稔氏にご協力いただきました。

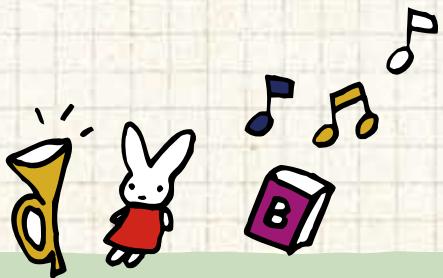
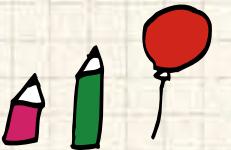
今回の研修会を実施して、日本における20年近くのハウス活動の中から、各団体が試行錯誤しながら、多くのノウハウを培ってきたことを確認できました。とくに、「病気の子どもと家族のためのハウス」という原点を常に意識することの大切さを再認識できました。活動期間が長くなってくると、活動の原点を当然のこととし、原点に戻ることを忘れがちですが、だからこそ明確に意識し続けることの重要性を、研修会に参加したハウス運営団体と共有しました。

この報告書は、研修会で共有されたノウハウをできるだけ分かりやすく紹介したいと思いを込めて作成いたしました。自宅を離れて病気とたたかう子どもと家族により役立つハウスにしていくための一助となれば幸いです。

今年度、研修事業に取り組めたのは、「子育て支援基金」の助成はもちろんのこと、講師やファシリテーターの皆様のご協力によるものと感謝いたします。また、研修会にご参加いただいた皆様本当にありがとうございました。企画に関しては、検討委員の皆様から貴重なご意見をいただきました。また、多方面の個人・企業・団体の皆さまからご協力をいただき、研修会を実現させることができました。心より御礼申し上げます。

2010年3月吉日

目次



はじめに	02
1. 患者家族滞在施設って何?	06
2. ハウス活動の広がり	08
3. 人材養成の必要性	10
4. 研修会 概要	12
5. 各プログラムの概要	14
アンケート結果	18
6. 研修会で共有されたノウハウ	22
7. まとめ	34
おわりに	36

資料

JHHHネットワークのなりたち	40
私たちの目指すもの（福岡合意）	42
全国滞在施設一覧（NPOファミリーハウス調べ）	44

1. 患者家族滞在施設って何? ～病院近くのわが家～



自宅を離れた専門病院での治療 子どもの闘病生活には付き添い家族が必要

子どもが高度治療の必要な重い病気になったとき、治療できる病院が自宅から通いきれない場所でも、家族は子どものために、その病院に駆けつけます。入院期間が数ヶ月になることも少なくないので、子どもが病気と闘っていくためには、家族が付き添って、子どもの気持ちを支えていくことが不可欠です。

家族は、面会時間内に子どもに付き添ったのち、夜は病院の外に宿泊先を求めることがあります。ホテルでの連泊や、外食ばかりになり、出費がかさんできます。もし病院に泊まることができるても、簡易ベッドやカーテン1枚だけで仕切られた落ち着かない環境での生活になり、身体的にも辛くなってしまいます。なにより、見知らぬ土地の病院生活では、知り合いもいなく緊張感と孤独感が大きくなりますし、仕事や学校のために地元に残っている家族のことも心配です。

このように、家族は、子どもの病気のことだけでも不安が大きいのに、さらに自分の滞在場所のことでも、経済的・精神的・身体的負担を抱えることになります。

闘病中の子どもの気持ちを支えるのは、そばに付き添う家族の存在です。例えば、小児がんの治療では、痛み、食欲の低下、吐き気や全身のだるさなどの辛い副作用が伴い、治療への意欲を減退させることができます。このような状況のとき、家族がそばにいる安心感が、子どもの治療への意欲を支えます。そのため、家族が疲れきってしまっては、子どもの治療への意欲に良い影響を与えません。

付き添い家族の経済的・精神的負担を軽減する 「病院近くのわが家」

そこで必要になるのが、病院近くで「わが家」のように過ごせる患者家族滞在施設(ホスピタル・ホスピタリティ・ハウス)です。ハウスは、少ない経済的負担で利用でき、プライバシーが守られた環境で、ゆっくり寝たり、料理や洗濯など日常生活に必要な設備も揃っています。

施設によっては、似た境遇の親同士が交流できるリビングなどの共有スペースもあり、ぬくもりのある「わが家」は看病中の家族の精神面をサポートするといわれています。

「病院近くのわが家」はトータルケアの一環 闘病中の子どもと家族のQOL向上の一助に

数年前までは、病気になった場合、「病気を治すためには、時には我慢も必要」という考え方方が通例でした。ところが近年では、治療だけでなく、生活の質(Quality of Life)を考慮して、子どもなら誰でも必要な家族とのコミュニケーション、学習や遊びの機会を提供していく事が治療にとっても重要だという発想が生まれ、実践が始まっています。こうした病気の子どもを包括的に支援することをトータルケアと言います。

長期にわたる治療や療養生活が必要な場合でも、生活の質(Quality of Life)を落さないことは、子どもの治療への意欲を引き出すことにつながります。「病院近くのわが家」は、このようなトータルケアの一環として位置づけられています。

病院近くで「わが家」のように安心して休める場所を提供することによって、付き添い生活に伴う家族の精神的・経済的・身体的負担を軽減すること。それが自宅を離れて治療が必要な子どもと家族の生活の質を支えることにつながると考えられています。

また、入院治療の合間、週末にハウスに外泊に来ることを、何よりも楽しみにしている子どもたちがいます。お母さんの手料理、自由にゲームができる事、お風呂にはいれること、誰にも気兼ねせずにお母さんに甘えられることなどは、入院中の病棟では難しいことです。ハウスは「病院近くのわが家」として、自宅のように、日常の当たり前のことができる場所です。

「病院近くのわが家」(ハウス)の呼称

「病院近くのわが家」のことを英語では、Hospital Hospitality House(ホスピタル・ホスピタリティ・ハウス=HHH)といいます。

日本では、運営団体により、慢性疾患児患者家族宿泊施設、患者家族宿泊施設、ファミリーハウス、サポートハウス、アフラックペアレンツハウス、ドナルド・マクドナルド・ハウス等の呼称があります。

本報告書では、以下、「ハウス」という表記で統一します。



2. ハウス活動の広がり

ハウスはアメリカから始まったといわれています

1972年、世界で最初のハウスである「ザ・ケビン・ゲスト・ハウス」がアメリカにオープンしました。白血病だったケビン少年の家族が始めたハウスです。

1974年には、現在世界30カ国で270箇所以上のハウスを提供している「ドナルド・マクドナルド・ハウス」の第1号がアメリカに開設されました。

1986年、米国各地のハウスネットワーク団体 NAHHH (National Association of Hospital Hospitality House, Inc.) が設立されました。

現在、米国には約580のハウスがあるといわれています。

運営団体の 全国ネットワーク(JHHHネットワーク)について

全国約125施設の運営団体の形態は「財団・NPO・任意団体」「企業のCSR・社会貢献活動」「病院」の大きく3種類があり、いずれも安心して、少ない経済的負担で利用できるよう、非営利でボランティアにも支えられて運営されています。また、病院が直接運営するハウスの一部以外は、行政からの運営費などの支援などは一切無く、個人・企業等からの寄付とボランティアの協力によって運営が成り立っています。

1997年より、全国の運営団体が一堂に会して情報交換を図ることを目的にネットワーク会議を開催しています。互いのハウス紹介、運営ノウハウの共有、ハウスの質的向上のための検討、専門家を交えた勉強会などを続けています。

また、2006年1月に福岡にハウス運営団体が集まりハウス運営の方向性が「福岡合意～私たちの目指すもの～」によって合意され、成文化されました(42ページ参照)。

その後、日本におけるハウスの認知度向上の取り組みとして、2007年3月に、ネットワークの名称を「JHHHネットワーク(日本ホスピタル・ホスピタリティ・ハウス・ネットワーク)」とし、ホームページを開設しました。続いて、2007年度には、ハウスの認知度とニーズの調査を行い、その結果を踏まえて、2008年度にハウスの認知度向上のための全国キャンペーンを実施しました。(40ページ参照)

日本での活動の始まり

日本のハウス活動も、子どもの病気治療に付き添う家族のニーズから始まりました。1991年に東京・国立がんセンター中央病院小児病棟「母の会」からハウスのニーズが高まり、1993年には、日本で最初のハウス専用施設「かんがるーの家」がオープンしました。(かんがるーの家は、NPOファミリーハウスが運営するハウスの1つです。)

全国への広がり

その後、都市部での闘病中にハウスの存在を知った患者家族が、地元で地域のボランティアと一緒にハウスを開設する形で活動が全国に広がりました。また、1998年と2001年には、厚生労働省の「慢性疾患児家族宿泊施設の整備」としてハウスの建設費が補助され、合計39施設が開設されました。その後、企業の社会貢献として、ハウスを開設する企業も登場しました。こうして、現在では、全国に約125施設のハウスが存在しています。

3. 人材養成の必要性



ハウスの活動は、日本では1990年代初頭にボランティア活動として始まりました。その後、行政支援によるハウスや、企業がハウス運営に参加する形態も広がってきています。これまでの約20年間は、ハウスを日本で立ち上げ、広めていく時期であったと言えます。

現在、全国でおよそ125施設が運営されるようになったものの、まだハウスのない県があり、宿泊施設のニーズがある病院の近くにハウスがないという状況もあり、ハウスを増やしていくニーズは無くなっています。

それと同時に、既存のハウスは、利用者の役に立つハウスにしていくために、運営の質的向上に今まで以上に努力が必要となります。ハウス運営は、利用者ニーズを第一に考えて運営することが不可欠であり、「ホスピタリティ」をもって対応し、「安心」「安全」「安価(少ない経済的負担)」に利用できるハウスを継続していくことが求められます。

また、社会における支え合いの機能として、ハウス運営はボランティアで成り立っています。こうしたハウス運営に関わってくださる個人・企業・団体などの皆様は、病気の子どもと家族のために協力をしてくださっています。多くの方からの協力で、実質的にハウス運営の質が向上することはもちろんですが、より多くの方がハウス利用者のことを見守っているという思いが、結果として利用者へのホスピタリティを高めることにもつながると考えています。

ハウス運営に関わるスタッフ(ボランティア)は、人数不足や高齢化などで、新しい人材が運営に加わることが必要になってきています。そうなるとこれまでハウス利用者などを大切に考えて運営してきたスタッフが培ってきたノウハウを、新しいスタッフに伝えていく努力が必要になります。今後ハウスが新設されたときに、そのハウスを運営するスタッフにも、過去20年間のハウス運営のノウハウを伝承したいと考えています。

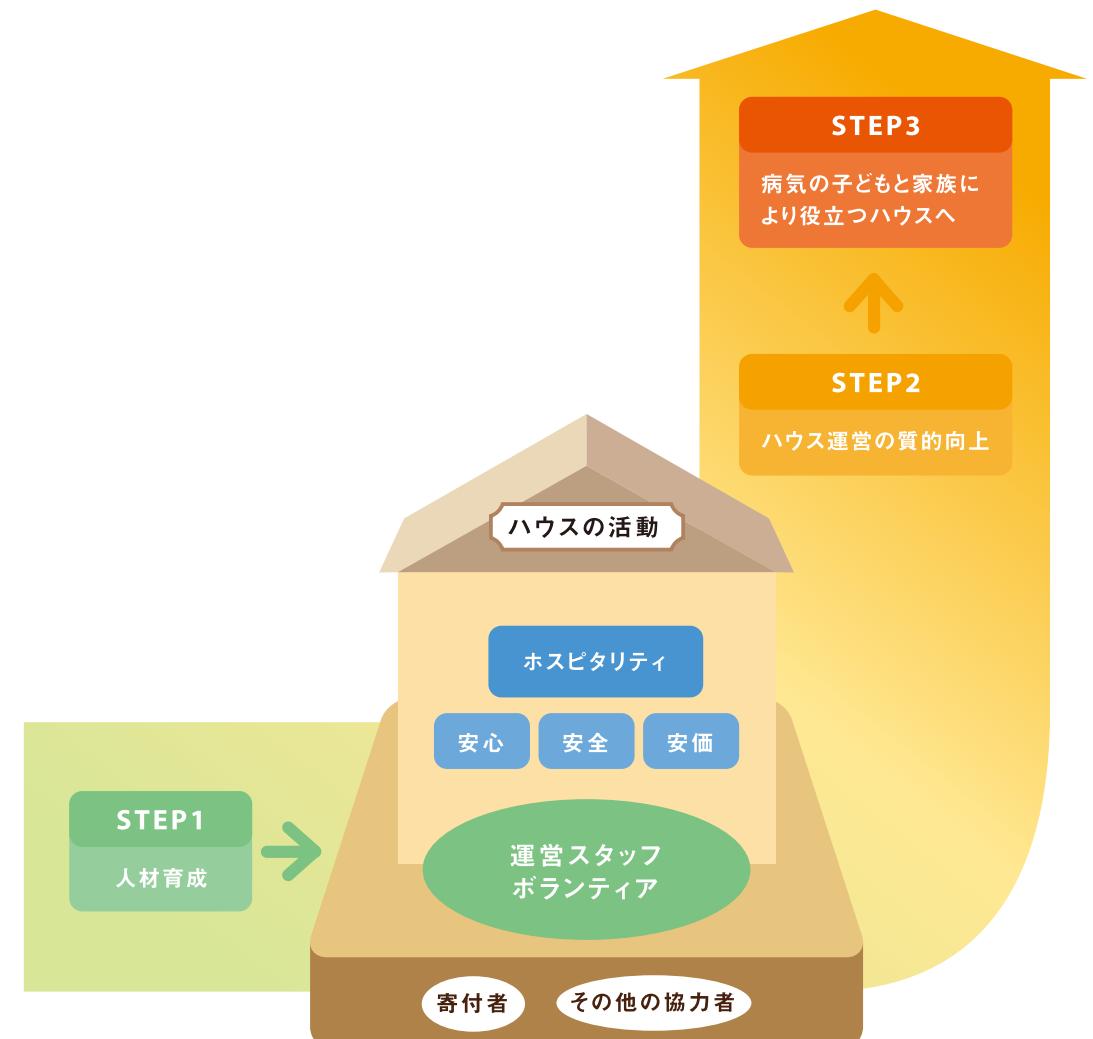
しかし、これまでハウス運営のノウハウに関する文章化は行われてきませんでした。ホスピタリティをもったハウスを運営していくこと、また寄付やボランティアの協力者を広げていくことは、ハウス運営に関わる一人一人が、努力・工夫して、試行錯誤しながら進めているのが現状です。

加えて、「人の気持ち」を扱うことが活動の根幹のため、系統だったマニュアル化に向かないという特徴もあります。そのため、ハウス運営のノウハウを文章化することが、なかなか進んでいない現状がありました。

そうした状況でも、各団体がこれまで試行錯誤しながらハウス運営してきた中から、ノウハウが蓄積されていることが、ハウス運営者の中で共通した認識になりつつありました。

そこで、今回、各団体で蓄積されているノウハウを、研修会の場で共有することにいたしました。

た。各団体がこれまでの活動を通じて、大切だと感じていること(ノウハウ)を研修会の場で共有し、またそれを報告書にまとめることで、ハウス運営者的人材養成を促したいと計画いたしました。





4. 研修会 概要

日 付 2009年10月17日(土)

参 加 者 数 99名

会 場 公立大学法人福島県立医科大学看護学部棟3階

概 要

「ハウス運営の質的向上」という切り口で、ハウス運営者、ハウス運営に興味のある学生などが集まって、情報交換をしました。

研修会の構成は、大きく二部に分けて実施しました。まず、第一部では、「ボランティアコーディネートについて」というタイトルで、マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン東京本部事務局長の大野寿子氏から、マイク・ア・ウィッシュでの取り組みについてご紹介いただきました。

マイク・ア・ウィッシュは、3歳から18歳未満の難病とたたかっている子どもたちに、生きる力や病気と闘う勇気を持ってもらおうと、そうした子どもたちの夢をかなえるお手伝いをすることを目的としている非営利の団体です。

今回、大野氏に講演をお願いしたのは、マイク・ア・ウィッシュの活動も、ハウスの活動と同じく、病気の子どもへの支援を目的としていて、運営には多くのボランティアが参加しているからです。しかも、子どもや家族の気持ちを大切に扱うことや、実際の作業には地味な部分も多く、ハウスの活動と同じように試行錯誤されているとのことでした。そうした活動の中で培われたボランティアコーディネートの仕組み・ノウハウは、ハウスの活動にも活用できると感じました。マイク・ア・ウィッシュのボランティアコーディネートの仕組みやノウハウを知ることで、各ハウス運営者たちが、ハウス活動におけるボランティアコーディネートについて、振り返る時間としたいと考えました。

また、第二部では、ハウス運営に必要でかつ、各団体の関心の高い共通のテーマについて分科会形式で、課題や情報の共有を行いました。3つの分科会に分かれ、各団体の抱えている課題や大切にしていること(ノウハウ)を紹介し合いました。第一分科会は「ボランティアに関するこ」とがテーマで、ファシリテーターは、引き続き、マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン東京本部事務局長大野寿子氏にお願いいたしました。第二分科会のテーマは「地域との連携に関するこ」とで、ファシリテーターは、千代田区社会福祉協議会地域福祉課長梅澤稔氏に依頼いたしました。第三分科会は「利用者対応に関するこ」とをテーマに、ファシリテーターは、NPO ファミリー ハウス 事務局長植田洋子氏が担当しました。

最後に、分科会の共有を全体で行い、自分が参加した以外の分科会の情報も得られるようにしました。また、参加者にはアンケートにも協力いただき、研修会で得たこと、感じたことを記入してもらいました。

プロ グ ラ ム

13:40 ~

第一部 講演会

「ボランティアコーディネートについて」

講師：マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン
東京本部事務局長 大野寿子

14:30 ~

休憩・移動

14:45 ~

第二部 分科会

①第一分科会

「ボランティアに関するこ」

ファシリテーター：マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン
東京本部事務局長 大野寿子

16:45 ~

②第二分科会

「地域との連携に関するこ」

ファシリテーター：千代田区社会福祉協議会
地域福祉課長 梅澤稔

17:00 ~

③第三分科会

「利用者対応に関するこ」

ファシリテーター：NPO ファミリー ハウス
事務局長 植田洋子

休憩・移動

全体会(分科会の共有)

5. 研修会 各プログラムの概要



◆第一部 講演会

「ボランティアコーディネートについて」

講師：マイク・ア・ウイッシュ オブ ジャパン
東京本部事務局長 大野 寿子氏

マイク・ア・ウイッシュ オブ ジャパンは、病気の子どもたちの夢をかなえる支援を目的とし、運営に多くのボランティアが参加しています。講演では、マイク・ア・ウイッシュの活動で大切にしていることやボランティアコーディネートの仕組み・ノウハウについてお話をいただきました。

限られた時間ではありましたが、非常にたくさんの大切な視点、考え方を教えていただきました。



- 「活動は、スタッフ・ボランティアのためでなく、病気の子どもと家族のためにある、という原点を忘れないこと」
- 「原点を意識することで、活動への共感やモチベーションを高められること」
- 「それが役割分担をしながら、目的のために活き活きと活動すること」など

◆第二部 分科会

各分科会のテーマにそって、各団体がこれまでのハウス運営を振り返りました。各団体が抱えている課題と、大切にしていること(ノウハウ)を情報交換して共有しました。

地域性や運営形態の違いから、各団体の抱える課題は多様ですが、共通する課題・大切にしていること(ノウハウ)が浮かび上がりました。分科会での情報交換を通じて、それぞれの団体で抱えている課題を解決するヒントを得ることができました。

分科会
①

「ボランティアに関すること」

ファシリテーター：マイク・ア・ウイッシュ オブ ジャパン
東京本部事務局長 大野 寿子氏

〈課題〉

- ハウス活動を支えるボランティアを増やすためにはどうしたら良いか？
- ボランティアがモチベーションを高く持って活動に参加するためにはどういう工夫ができるか？



〈大切にしていること(ノウハウ)〉

- 「活動の原点である“思い”や目的を、常に強く意識して、ボランティアをコーディネートしていくこと」
- 「活動の現状や課題をメンバーで共有することで、“自分が活動に役立っている”という実感を持てるようにすること」など

分科会
②

「地域との連携に関すること」

ファシリテーター：千代田区社会福祉協議会
地域福祉課長 梅澤 稔氏

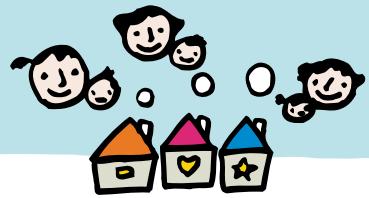
〈課題〉

- ハウス活動に対する、地域での認知度や理解度が低い。認知度や理解度を上げるためにどうしたらよいか？
- 地域の人がハウス活動を知り、参加できるように工夫していることはどんなことか？



〈大切にしていること(ノウハウ)〉

- 「社会福祉協議会や地域のNPOセンターの協力を得て、地域のイベントに参加してみる」
- 「地元のボランティアを受け入れ、地域の人たちとの接点を増やすことで、ハウス活動への信頼を高める」
- 「地域のマップ作りをきっかけにハウス活動を地域の人に紹介していく。活動を知らない人へは、相手に共感してもらえるように、活動の内容だけではなく、活動の意義も伝える」など



分科会 ③ 「利用者対応に関するこ

ファシリテーター：NPOファミリーハウス
事務局長 植田 洋子氏

〈課題〉

- 利用者のためになる支援とは、どのようなものか



〈大切にしていること(ノウハウ)〉

- 「状況の違う利用者にどのような対応や声かけをするべきか?いつも戸惑いがあったが、その場に応じて心からの気持ちを伝えることが大切だと改めて思った。」
- 「自分もハウス活動を支えたいと言ってくれた利用者さんの言葉で、一人一人の利用者の声、ニーズに耳を傾け、利用者と一緒にハウスを作っていく大切さを感じた。」など

この分科会参加者には、ハウス利用者への対応を担当しているメンバーが多くいました。利用者とのエピソード、利用者からもらった印象的な言葉などが参加者から紹介され、実感のこもった事例や意見が出されました。

◆全体会 まとめ

各分科会で話し合った内容を、参加者全員で共有するため、ファシリテーターから報告をしていただきました。ハウス活動の原点に立ち返り、「病気の子どもと家族のためのハウス」というミッションにもとづいて、様々な方々から協力を得られるように活動をしていくことの大切さを再確認できました。

参加したハウス運営者が、病気の子どもと家族のために、活動に励もうと大きな活力を得ることができ、大変充実した研修会となりました。



講師・ファシリテーターの紹介

大野 寿子 (おおの ひさこ)

マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン 東京本部事務局 事務局長

香川県生まれ。アメリカで生まれた非営利のボランティア団体「マイク・ア・ウィッシュ」の日本での活動拠点が、1994年に沖縄から東京に移るのを契機に活動に参加。1998年より現職。マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンの国内支部は、仙台、関西、名古屋、福岡、北陸、静岡、札幌、広島の8つ。活動を支えるボランティアの数は3500人を超えた(2008年末)。2005年2月、出会った子どもたちからのメッセージを伝えるために、語りおろし『マイク・ア・ウィッシュの大野さん』(メディアファクトリー)を刊行。

梅澤 稔 (うめざわ みのる)

社会福祉法人千代田区社会福祉協議会 地域福祉課 課長

東京都生まれ。大学卒業後、薬品会社に就職。大阪勤務の際、阪神淡路大震災に遭遇し、地震の恐怖を体感する。1995年に千代田区社会福祉協議会へ転職。ボランティアセンターに勤務し、たくさんの方との出会いやふれあいを通じて、たくさん刺激を受けている。現在は、地域福祉課に勤務し、ご近所同士の助け合い活動をすすめるため、地域との連携・協働に努めている。

植田 洋子 (うえだ ようこ)

特定非営利活動法人ファミリーハウス 事務局長

新潟県生まれ。大学で心理学を専攻。地理情報システム、CROなどの企業勤務のかたわら上智大学カウンセリング研究所にてカウンセリングを学ぶ。1990年頃よりいのちの電話、子ども虐待防止センターに関わり、1998年、ファミリーハウスが相談事業を始めるにあたって、相談員として活動に参加。その後、2005年5月より現職。



アンケート結果

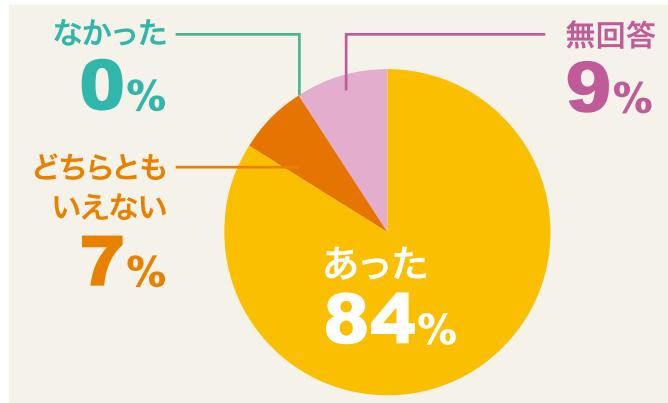
研修会の参加者にアンケートを取りました(回答者数 45 名)。

研修会に参加したことで、ハウス運営の質的向上のために、「大事だと気づいたこと(または再認識したこと)があった」という人が大多数でした(講演会 84%、分科会 89%)。そのため、効果の高い研修会を開催することができたと考えています。

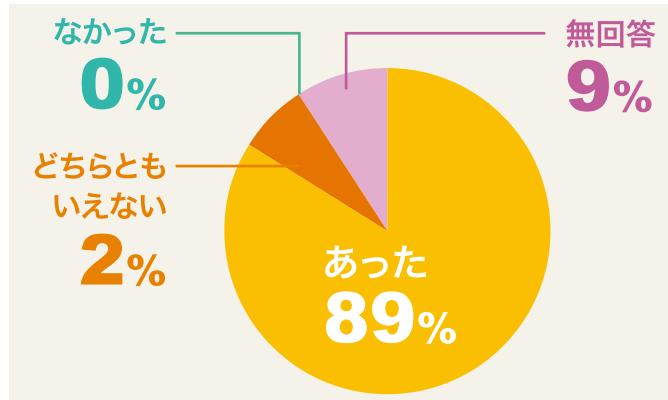
Q

ハウス運営の質的向上のために、大事だと気づいたこと(または再認識したこと)はありましたか?

講演会



分科会



アンケートでは、研修会で得た(あるいは再認識した)ノウハウについて、自由記述で記入いただきました。ここでは、その一部をご紹介します。

Q

今回の各プログラムを通じて、皆さまの団体での「ハウス運営の質的向上」のために、大事だと気付いたこと(または再認識したこと)や具体的に活用できそうだと思った他団体のノウハウを教えてください。

ボランティアコーディネート・ボランティアに関するこ

- ボランティアの活動は、自主性を重んじると思っていました。でも、自主性を向上させたり、きっかけを与えてあげたり、刺激することの必要性を学びました。黙って待っているだけでなく、一人ひとりのことを良く見て、共に活動していただけるよう働きかけていく必要性を実感しました。
- 様々なタイプのボランティアさんとの関わりについて、相手を知ることが必要であるし、向き不向きがあるので、相手を良く知った上でその人を活かせる内容をお願いしていくことが大切だと思いました。
- ボランティアさん同士の横のつながり、先輩ボランティアが新しい人を育てていく環境作りが大切。次世代に人の命の大切さを伝えていきたい。
- ボランティアにもいい話ばかりでなく、苦労話や会の課題など情報を共有する。スタッフ・ボランティア・利用者皆で、共に築いていくハウスであるという意識を皆さん持つてもらうことが大切だということを改めて感じた。
- スタッフ・ボランティアのモチベーション維持について、各団体それぞれ苦労があることを知ることができた。「いかに活動の目的を共有するか」「活動の原点をぶらさない」ことが大切であることがわかり有意義であった。



地域連携のこと

- 社会福祉協議会などと協働すること、地域のイベントに参加して、活動を知っていただくことが第一歩であると再認識した。
- 地域の中で、ボランティアを募集して、「地域の方に利用してもらうのではなく、どういう施設か知ってもらい、ボランティア活動を支えていただく」ことも、「地域に根ざしたハウス」になるひとつの方法だと思った。
- 施設の説明だけでなく、活動への共感や理解を得られるよう伝えていくことが大切。活動への理解や共感が、団体への信頼感へつながると思う。
- 地域の住民・企業・学校などに入っていくこと。また、地域での他団体とのネットワーク構築も活動の広がりのために大切であると思った。

利用者対応のこと

- 利用者の話をよく聞くことが大切。ケースBYケースが大切。
- 病気になった方たち(家族を含む)の大変さを認識し、ハウスを利用される方たちの心の状態をみること。私たちは相手の心を受け入れてあげることが大切だと思いました。
- 亡くなった方のご家族に対して、どんな言葉をかけたら良いか。という参加者からの質問について皆で話えたことがよかったです。答えはなく、それぞれの思いで、心からの気持ちを伝えいく。日ごろから心構えを持つことが話合いでわかった。
- 利用者さんの言葉から、運営者側の考えでなく、利用者さんと一緒にハウスを作っていくことの大切さを改めて感じた。利用者さんの声やニーズをしっかりとらえていきたい。

研修会全体を通じて

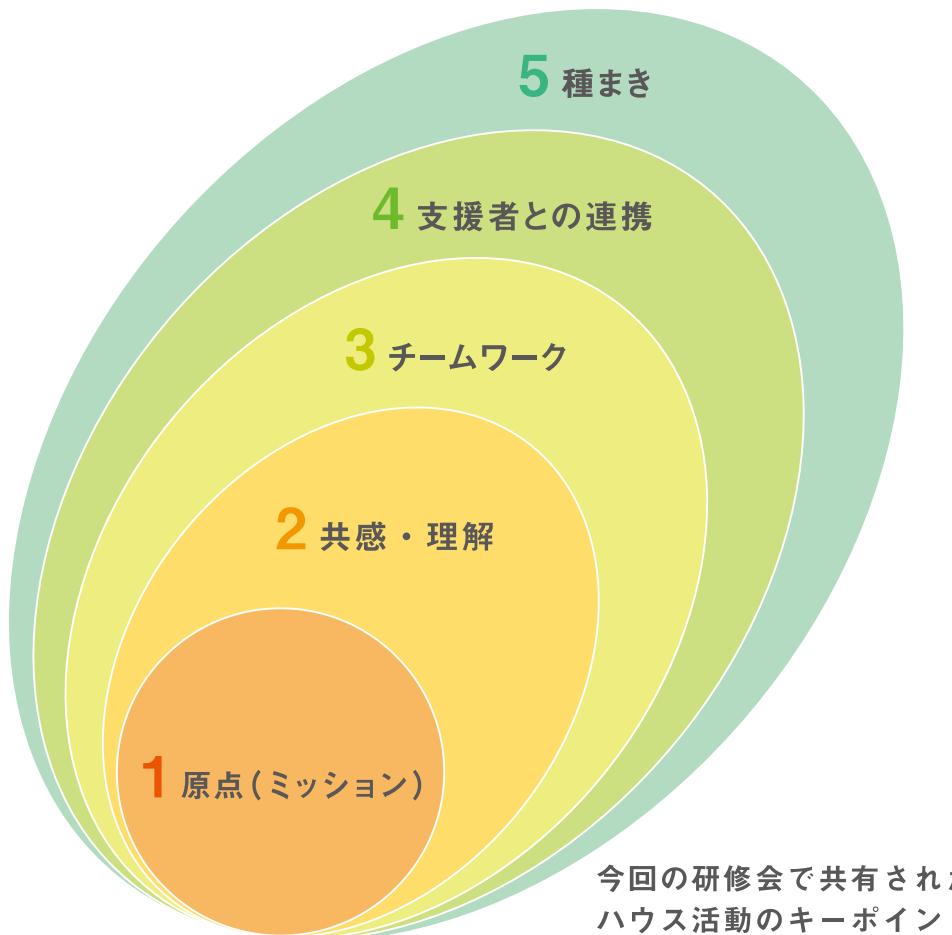
- 利用者のために、自分たちは活動しているのだということを意識し、利用者・ボランティア・スタッフ・寄付者・寄付企業が一緒にハウスを作っていることを忘れず日々の活動に想像力をたくましくしながら、活かしていきたいと思いました。
- 今回のメイク・ア・ウィッシュの講演は良かったと思います。今後も、子どもとかかわるような活動を行っている団体さんの講演を聞くことも良いと思いました。
- 参加人数も多く、より親しめる会で大変満足しました。ハウスを全国的に認知していただけるような努力、情報交換が必要だと感じています。利用者ニーズも変化しているので、今後も会の問題点等を話し合える場が欲しいです。
- 今回の研修会は、短い時間にも関わらず内容の濃いものでした。開催関係者の皆様のホスピタリティ精神が十分感じられ、あたたかい雰囲気と共に各団体との交流も活発であったと思う。人材の育成がハウスの質的向上につながると思いました。

6. 研修会で共有されたノウハウ



今回の研修会では、ハウス運営団体が大切にしていること（ノウハウ）が、たくさん情報交換されました。半日のプログラムでしたので、ハウス運営の質的向上に必要なすべての領域を扱うことはできませんでしたが、それでもハウス利用者により役立つハウスを運営していくために必要なノウハウをたくさん共有することができました。

今回の研修会で共有されたノウハウを、今後のハウス運営者的人材養成に役立てるよう、この報告書では大きく次の5つのポイントに分けて紹介したいと思います。その5つのポイントは、相互に関連しています。「1.原点（ミッション）」がハウス運営の根幹となっており、「5.種まき」にいくに従って、徐々に外部に開いていくイメージといえます。



1. 原点（ミッション）

自宅を離れて病気とたたかっている子どもとその家族のためにハウスを運営しているという活動の目的を忘れないことが重要です。ハウス運営はすべてこの原点（ミッション）から始まっており、またこの原点こそが目指すべきところです。つまり、病気の子どもと家族により役立つハウス運営に向けて努力を重ねていくことが不可欠です。

2. 共感・理解

ミッション達成のために、一人一人異なる状況にある利用者の気持ちを理解することが必要です。また、利用者に直接会うことがない活動メンバーも、利用者の状況をイメージ豊かにし、共感することが大切です。

3. チームワーク

ハウス運営が多く人の協力で成り立っているということに加えて、24時間365日動き続けるハウスを、利用者に役立つものにしていくためには、一人や二人の努力では限界があります。安全を守るためにも、きめの細かい対応が必要であり、そのためにはチームで対応していくことが大切です。

4. 支援者との連携

地域の個人や企業・団体、関係機関などと協力関係を築いていくことを意味します。ハウス運営には地域からの協力が必要であるだけでなく、病気の子どもと家族が抱えるニーズはハウスだけで対応できるものばかりではありませんので、関連他団体や地域の関係部署との連携をもつことが重要です。

5. 種まき

ハウスの必要性を外部に発信して、将来の支援者を増やしていくことです。活動の必要性を理解してくださる人が増えれば、学校や仕事、家庭の都合など様々な事情ですぐには協力することが難しくても、中長期的にハウス運営に協力してくださる方を増やせる可能性が高まります。

次ページからは、この5つのポイントの順に、研修会で共有されたノウハウを具体的に紹介します。ここで紹介する「研修会で紹介された具体的なノウハウ」は、研修会の参加者に記入いただいたアンケートを参考に記載しています。



1. 原点（ミッション）

「病気の子どもと家族のためのハウス」という原点を常に意識する

ハウス活動の原点は、「自宅を離れて病気とたかう子どもと家族が、病院近くでほっと休める場所を必要としている」ところにあります。各地のハウスは、こうしたハウスの必要性を感じた方々によって設立されてきました。ハウスが、これからも病気の子どもと家族に役立ち続けるためには、そうした設立時の原点（ミッション、活動の目的）を、常に意識し、また目指し続けることが必要です。

ハウス活動を続けていると、こうした原点は当然のものとして、明確に意識しなくなりがちです。しかし、現在も、ハウス活動には法的枠組みが無く、ハウス運営は、寄付者やボランティアなどの協力と、利用者からの理解によって成り立っています。したがって、活動に参加する全員が、パッションとして、活動の原点をしっかりと意識することが大切です。また、そうすることで、病気の子どもと家族のために役立つハウスづくりに向けて、活動の質を高め続けることができます。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 活動の原点となった出来事や思いを活動メンバーで共有する。
- 原点の思いを掘り起こし、皆で活動を行うエネルギーとする。
- ハウスを必要としている子どもと家族がたくさんいることの認識と自覚が大切。
- 活動に関わる全員で、共通の目的と理念を信じて活動する。
- 利用者はハウスがあることで、支えられ励まされていることを、活動メンバーで共有する。
- 運営者は皆、利用者から糧を得ている。利用者と利用者の為のハウスを大切にすることでハウスの質も高まる

2. 共感・理解

一人一人のハウス利用者を理解・共感する

ハウスを必要としている家族の状況は、子どもの病気の種類や病状、家族構成などによって様々です。ハウスに対して、それぞれの家族が必要としている多様なニーズを理解しようと努力することが必要です。そのことから、ホスピタリティあるハウスづくりが始まります。

多様な状況の家族と接するので、これさえ守れば大丈夫という答はありません。画一的に対応するのではなく、一人一人のハウス利用者にきちんと向き合っていくことが重要です。それぞれの家族の多様な状況を理解して、できる限り、きめ細かく対応していくという姿勢が大切です。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 利用者さんの役立つハウスにするために、各団体で日々模索しているが、運営団体側の思いだけでなく、利用者の声を聴くことこそ役立つハウスであり、いつも利用者と一緒にハウスをつくって行く事を忘れない。
- 利用者の為に「無」になる。患者家族の立場に立って関わることが大切。
- 白紙になって利用者の話を良く聞く、まずは相手を受け入れることが大切。
- 家族により様々な事情がある。ハウス利用に関して、利用者の話をよく聞き、ケースバイケースで対応する。
- 利用者はひとりひとり違う。表面に現れる事象だけでなく、利用者の背景にある事も考えて対応する。
- 辛い状況の利用者への言葉のかけ方に随分と悩んだ。対応について答えはない。それぞれの運営者が、その場に応じて心からの気持ちを伝え接することが大切。



活動に関わる全員が利用者の状況を理解・共感できるようにする

ハウス運営団体では、ハウス利用者と直接コミュニケーションをとる活動メンバーは限られています。それは、病気の子どもと家族は、病気になったというショックや自宅を離れた闘病生活からくる精神負担を抱えていることが多いため、一人一人との丁寧な対応が求められるためです。

そのため、直接対応するメンバーが、ハウス利用者のメッセージを、活動メンバー全員や協力者と共有する工夫が重要になります。もちろん個人情報への配慮は必要です。そうした配慮をしたうえで、ハウスが実際にどう利用されているかを活動メンバー全員で共有することで、ホスピタリティあるハウスに向けて活動を進めることができます。

ハウス利用者と接しないボランティアや寄付者が、ハウスがどう活用されているかを理解するためには、感性（共感力・想像力）を使うことが求められます。そうした感性を磨いていくように、情報発信を工夫していくことも大切です。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

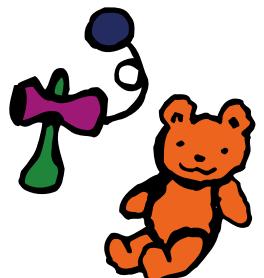
- 利用者と接する機会があった人が（あるいは利用者感想ノートを通じて）、利用者の声や喜びを伝えていく努力をする。活動の意義や必要性をみなで共有する。
- 自分たちの活動が利用者にどう役立っているかイメージできる感性を磨く（イメージできると、活動へのモチベーションも上がる）。
- 他のスタッフからの報告を聞いて、自分たちのしたことがどう役に立っているかイメージできる感性、想像力を皆が持ち、共感出来る事が大切。
- スタッフ・ボランティア、運営に関わる皆が情報の共有を意識的に行い、互いに活動への理解や活動の目的意義などの気持ちを深めていく。

利用者にもハウス活動を理解してもらう

ハウス運営においては、運営者が利用者を理解するだけでなく、利用者にもハウス活動を理解し、協力していただくことが大切です。そのため、運営者は、ハウスの主旨や目的を、利用者にきちんと説明する必要があります。ハウスの主旨や目的を理解して利用していただくことが、安全で安心なハウスの継続につながります。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 利用者にもハウス活動を理解してもらう。利用者ができるボランティアとして、次に利用する方のために掃除をしていただくことを、声かけをすることも大切。
- 利用者から、「ハウスを利用して自分のこれまでの人生観が変わった。いつか自分もできることをしたい」という言葉をもらったことがあった。利用者に活動の理解をもらうことがより良いハウス運営のために必要と再認識した。





Group

3. チームワーク

ハウス活動は一人ではできない

ホスピタリティをもってハウス利用者に接していくためには、きめ細かな対応が必要です。ハウスを「病院近くのわが家」として、自宅のような場にしていくためにも、お掃除をはじめとして、一人でハウス活動をすることには限界があります。実際にハウス活動はチームで行っていくことが必要です。

しかし、ハウス運営に参加するボランティアの背景（職業、年齢、活動への参加経緯など）は様々であるため、チームワークが容易でない場合もあります。そのため、チームづくりのためには、ボランティアの共通点を明確に意識することが必要です。その共通点とは、ハウスの原点（ミッション、活動の目的）に共感して、活動に参加しているということです。この原点を、日ごろから確認し合うことで、チームワークを組んでハウス活動をすることができるようになります。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 活動は一人でしているのではなく、皆で行っている。皆で確認をとりながら活動をすすめていく事が大切。
- チームで活動して、情報や気持ちを共有する。仲間同士でモチベーションを上げあう事も大切。
- 同じ目的のために活動している仲間同士がつながり合うことで、活動がより豊かになる。
- 活動を共有することが重要。喜びはもちろん、よい事ばかりでなく団体全体の苦労も分かち合うことで、自分たちの団体だという帰属意識を高め結束することができる。
- 他のハウス運営団体の活動を知ることで、同じ思いでたくさん的人が活動していることなどを知り、活動の励みとする。
- ボランティア同士で情報交換をしたり、勉強会をすることができる。

仲間を知って育ちあう

ハウス活動はボランティアで成り立っているため、活動全体のあらゆる場面で、ボランティアの活躍が期待されています。例えば、ハウスの大切な活動のひとつに、清掃があります。治療中の子どもが利用するので、清潔な環境を用意することが必要です。清掃は地味な活動ではありますか、ハウス利用者にホスピタリティの気持ちをそっと伝える大切な活動にもなっています。

また、新たな支援者を集めるために、チャリティイベントを開催することもあります。こうしたイベント運営にもボランティアの参加が不可欠です。

このように、多様なボランティア活動を、多様な背景をもつボランティアの協力で実施していくためには、ボランティア一人一人の特徴をお互いに知ることが大切です。そして、最初は、それぞれの人の得手不得手に合わせて、役割を分担することが重要です。

さらに、ボランティア同士が学び合い、成長をしていくことで、一人一人の担える活動の幅が広がっていきます。ハウス運営は、ボランティア不足で悩むことが多いのですが、新しいボランティアを集めていき、またそうしたボランティア一人一人の成長を期待し促していくことで、活動の幅が広がっていきます。そのことが、結果として、病気の子どもと家族により役立つハウスづくりにつながっていくと考えられます。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- ボランティアコーディネートをすることによって、ボランティア本人と団体の両者にとって、十分満足できるボランティア活動にすることが重要。
- 先輩ボランティアが新しいボランティアに活動について伝え、互いに育ちあう文化を作りあげていく。
- ボランティアには3つの力（①考える力・②表現する力・③協調性）が必要。
- 一緒に活動するスタッフ・ボランティアといった仲間が、どういう特徴があるか知ること。その特徴を活かして活動することができる。
- ボランティアにもいろいろな人がいる。その人に向いていることと、向いていないことがある。たくさんのボランティアメニューを用意して、その人に向いている役割から活動を始めることが大切。
- ボランティアの自主性を重んじるだけでなく、活動の目的のためになることへのきっかけ作りや刺激も必要。



4. 支援者との連携

活動への共感で支援の輪を広げる

ハウス活動は、寄付者やボランティアの協力により成り立っています。既存の支援者が継続的に活動に協力いただけるよう努力していくことは大切ですが、加えて、ハウス活動を根付かせていくためには、新しい支援者を増やし続けていくことも重要です。

ハウス活動への支援者を増やしていくときに、活動の目的や必要性への共感というプロセスを経ることが必要です。寄付者やボランティアは、ボランタリーな気持ちで活動を支援してくださっています。そのため、新たな支援者を増やしていくときは、活動の原点に共感してもらうことが重要です。運営団体メンバーが実感のこもった言葉で、「自宅を離れて闘病生活をおくる子どもと家族にとってハウスが必要であること」を伝えることで、共感を生み出し、支援者になってくださる可能性が高まります。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 活動の目的・必要性を皆で共通に持って活動し、それを伝えることにより支援の輪を広げていく。
- 活動した人が、自分の言葉で活動の内容や必要性、団体のことを伝える努力をする(自分の言葉で発することのできるボランティアが増えすることで、活動が広く伝わる)。
- ハウスの活動をまだ知らない人に理解してもらうためには、活動の目的だけを伝えるのではなく、相手に共感してもらうことが大切。一番は、個々の方が活動に共感してくれることで支援の可能性が広がる。

支援者との連携で、ハウス活動の幅を広げる

ハウス運営団体だけでできることは限られています。そのため、地域の行政機関や他団体と連携していくことで、活動の幅が広がります。しかし、ハウスの利用者はその地域に住む子どもや家族ではないため、活動への理解が得にくい状況があるという話題が研修会で出ました。これはどの団体も直面したことがある課題だと思います。

この課題に対応していくためには、各担当者にハウス活動を理解・共感していただくことがポイントだという意見が出ました。ハウス活動は地域を超えた国全体の相互支援の仕組みとして考えることが必要ですが、そのことに対して理解していただける方を各地で地道に増やしていくことが大切です。そして、ハウス活動の必要性に理解と共感をしていただくことで、団体への信頼感を持っていただくというプロセスが不可欠です。

例えば、ハウス運営団体が、地域の社会福祉協議会と連携することで、地元のIT企業と知り合うことができ、その後の協力も得られるようになったという事例がありました。また、ハウス近隣の食事ができるお店の情報を集めるという具体的な活動を通じて、地元の店舗にハウス利用者のことを理解いただけた事例も紹介されました。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 社会全体の問題としてハウスを認知してもらう環境作りが重要。国全体として活動を支えていく環境づくり・風土作りのために、各地で地道な活動が大切。そうなれば、行政等の協力も得やすくなる。
- 開かれたハウスを目指し、地域の人の協力や支援を受けて運営していく。
- 地域の人たちに活動や団体を知ってもらい、ボランティアとして関わってくれる人を増やすことで、団体に対する信頼感を得ることができる。
- 近隣マップ作りなどをきっかけに、地域に出て地域の人たちに、活動を知ってもらうよう努める動きも大切。
- 地元と密着して活動できること(地域に根ざしたハウス)が望ましい。ボランティアを集めていくためにバザーやオープンハウス、預かり保育など、地元の人に活動を知ってもらう努力をする。
- NPO同士のネットワーク構築により、より活動が拡がることが期待される。また他団体との連携により、患者家族の多様なニーズの発見にもつながる。
- 他団体・他機関などとつながりうまく連携して支えあっていけるとより活動の幅やできることが拡がる。地元の社会福祉協議会とも連携していくと良い。

5. 種まき

活動への理解者を増やし、将来の支援者を増やす

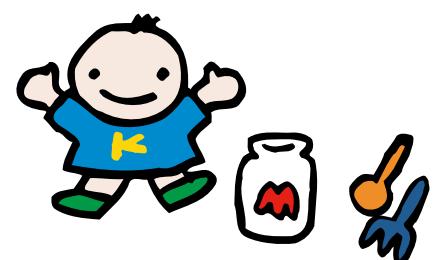
ハウス活動は、たくさんの個人や団体・企業などの協力を得て成り立っています。ハウス活動が根付いていくように、継続的に支援してくださる方を募集していくことが必要です。

そのためには、仕事や家庭、学校などの事情で、今すぐにハウス活動に協力できない方々にも、ハウスの必要性を伝え、ハウス活動への理解と共感をもっていただくようにしていくことが大切です。

すぐに協力が得られない場合でも、誠意を持ってハウスの活動を紹介することで、将来の支援者を増やせる可能性があります。そのように捉えて、ハウス活動を団体外部に説明することに積極的に取り組んでいくことが重要です。

～研修会で紹介された具体的なノウハウ～

- 支援者を増やすために、様々な場面でより多くの人に活動を紹介し、理解してもらえるよう努めることが大切。
- 地域やいろいろなところに入していくことが大切。
- アプローチ（発信）。知っていただくことの大切さ。
- ボランティアが活動を周囲に知らせることで、「種をまく」という重要な役割を果たすことができる。
- 活動している人が常に活き活きとしていることが、協力者を得ること、活動の広がりにつながる。



7.まとめ



今回の研修会では、ハウス運営団体が大切にしていること(ノウハウ)の一端を共有することができました。そして、ハウス運営者的人材養成に役立てるために、研修会で共有されたノウハウを、5つのポイントに分けて報告書にまとめました。その5つのポイントとは、「1.原点 2.共感・理解 3.チームワーク 4.支援者との連携 5.種まき」でした。

今回の事業で得られたことは、大きく次の5点にまとめることができると思います。

第一に、ハウス運営に必要な抽象度の高いノウハウを文章化できました。ハウス運営において、病気の子どもと家族にホスピタリティをもって対応していくためには、画一的なマニュアルでは限界があります。病気の子どもと家族が抱える、ハウス利用についての多様なニーズに対応していくための、比較的抽象度の高いノウハウが求められます。

しかし、抽象度の高いノウハウは、文章化が難しいことも事実です。そのため、これまでノウハウの文章化に取り組めていませんでした。今回このように研修会で共有された情報を報告書にまとめることで、ノウハウの文章化を一步進めることができました。

第二に、経験にもとづくノウハウを共有できました。研修会で紹介されたノウハウは、各団体が試行錯誤のなかで蓄積されてきたものであり、また団体間で共通するものも多くありました。そのため、今回の研修会で共有されたノウハウは、どのハウス運営団体でも実現可能なものだといえると思います。

第三に、今回の研修会では、ハウス活動と同じように、病気の子どもを対象に活動をしているメイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンでの取り組みをご講演いただき、ハウス運営団体の参考となることが大変多くありました。ハウス運営

団体の内部研修では見えづらい、大切な視点やノウハウに気づかされました。今後も、外部の団体をお招きして研修をしていくことで、ハウス活動に広がりが出ることが期待されます。

第四に、ノウハウの文章化の必要性を再確認できました。これまでハウス運営団体は、試行錯誤を続けてきました。しかし、ハウス活動が日本で始まって20年近く経ち、各団体で培われてきたノウハウを具体的な言葉にできる時期にきていることを今回の研修会で実感できました。ハウス活動を社会に根付かせていくためにも、ハウス運営において大切なこと(ノウハウ)を文章化し、社会に発信し、共有していくことが必要だと考えます。

第五に、研修会の重要性を再認識できました。ノウハウを文章化していくことはこれからも取り組み続けていきたいと考えます。しかし、ハウス利用者のニーズに対応していくためには、文章化されたノウハウだけでは限界があります。ハウス利用者のニーズは多様であり、また変化することも考えられます。そのため、役立つハウスにしていくためには、各団体で試行錯誤を継続していくことが必要です。そして、研修会の場で各団体の経験を皆で共有して、常に考え続けていくことも大切だと考えます。

今回の事業において、ハウス運営に必要なノウハウの一端を共有でき、また文章化できたことで、ハウス運営者的人材養成に関する第一歩を踏み出せたと考えています。この報告書が、各団体でのハウス運営の質的向上の一助につながればと願っております。さらに、今後もハウスの質を高めていくために、研修会を継続的に開催し、この報告書にまとめたノウハウをさらに更新し、社会に発信していくことが必要だと考えています。

おわりに



私たち、「病院近くのわが家」を日々運営している中で試行錯誤を続いているものの、その中で培ってきているものを発表したり文書化することに、これまで十分に取り組むことができていませんでした。今年度、研修会を実現できたのは、ひとえに、独立行政法人福祉医療機構「子育て支援基金」の助成、及び多方面の方々のご厚意とご尽力によるものです。

研修会実施のために「検討委員会」を2009年7月、9月、11月に開催しました。委員の皆さん、オブザーバーとして検討委員会にご参加いただいた企業の皆様からも、其々の立場から貴重なご意見をいただきました。

研修会当日には、マイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン東京本部事務局長の大野寿子氏から講演と分科会のファシリテーターにご協力をいただきました。また、千代田区社会福祉協議会地域福祉課長の梅澤 稔氏にも、ファシリテーターをお引き受けいただきました。お二人とも、大変ご多忙な中、ご協力いただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

また、福島県立医科大学附属病院の近くでハウスを運営する、パンダハウスを育てる会の皆様には、今回福島で研修会を開催するにあたり、多方面でご協力を頂きました。ありがとうございました。

そして何より、研修会にご参加いただき、様々な情報交換にご協力いただいた全国のハウス運営団体の皆様に、心から御礼を申し上げます。

日本では1990年前後から、「病院近くのわが家」の必要性を感じた人たちから始まった活動が、各地に広がりました。当初は闘病経験のある家族や、同じ問題意識を持つ医療従事者が中心でしたが、現在では、活動の輪が広がり、多方面の方々からご理解とご支援をいた

だけるようになってきています。そのような中で、病気の子どもと家族のために役立つハウス運営に向けて、着実にノウハウが蓄積されてきていることを実感しております。

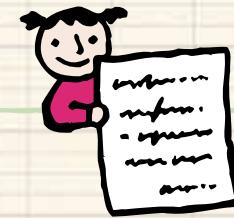
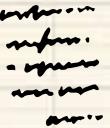
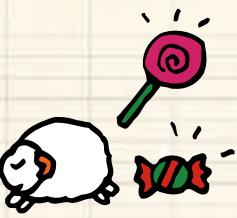
今年度、研修会を実施して、ハウス運営のノウハウの一端を共有することができました。私たちはこれからも、病気と闘っているお子さんとご家族にとって、ほっと休める「病院近くのわが家」となるようなハウス運営の「原点」を大切にして、またそのようなハウスを目指して、努力を重ね、継続的にハウス運営団体間でノウハウを共有していきたいと思います。

子どもが病気になることは誰にでも起こりうることです。そのとき「病院近くのわが家」が子どもや家族の不安や負担を少しでも軽減させられるよう、多様な方々の協力を受けながら、これからも真摯に運営に取り組んでいきたいと思っています。

最後に、改めまして、研修会にご協力いただきましたすべての皆様に心より御礼申し上げます。



特定非営利活動法人ファミリーハウス
2010年3月吉日



資料



JHHHネットワークのなりたち



ホスピタル・ホスピタリティ・ハウスは、1970年代から海外でつくられるようになりました。

日本では、1990年前後からハウスをつくるための運動やJHHHネットワークの前身にあたるファミリーハウス全国ネットワーク会議の開催が行われ始めました。

1972年 世界で最初のホスピタル・ホスピタリティ・ハウス「ザ・ケビン・ゲスト・ハウス」がアメリカに開設

1974年 世界的にハウスを提供している「ドナルド・マクドナルド・ハウス」の第1号がアメリカに開設

1986年 ハウスの全米ネットワーク組織NAHHH設立
(National Association of Hospital Hospitality House, Inc.)

1988年 病院のこどもヨーロッパ協会(European Association for Children in Hospital / EACH)が、ハウスの必要性を明記した「病院のこども検証(EACH Charter)」を合意。

1993年 日本で最初のハウス専用施設ファミリーハウス「かんがるーの家」を建設

1997年 第1回「愛の家」^{※1} 全国ネットワーク会議開催

1998年

厚生省の補正予算により、全国でハウスを32箇所設置決定

2001年

厚生労働省の追加予算により、全国でハウスをさらに7箇所設置
「AFLACペアレンツハウス亀戸」開設
「ドナルド・マクドナルド・ハウス せたがや」開設

2006年

ハウス運営の指針となる「私たちが目指すもの(福岡合意)」を採択。全国のハウスの理念と目指すものを共有し、より連携して活動していくことを合意。

2007年

ネットワークの名称を、JHHHネットワーク(日本ホスピタル・ホスピタリティ・ハウス・ネットワーク)とし、ホームページを開設
ハウスの認知度とニーズ調査を実施

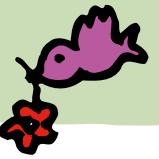
2008年

ハウスの認知度向上のために、『ささえよう!病気の子どもと家族「病院近くのわが家」全国キャンペーン』を実施

※1「愛の家」は、「ファミリーハウス」の前身



私たちの目指すもの（福岡合意）



病気の子どもとその家族が、自宅から離れた医療機関で検査・治療を受けるために、「安心・安全・安価」で滞在できる施設（以下、滞在施設）を提供する運動が始まってから、日本ではすでに10年以上の時が経ちました。各地での努力の積み重ねの結果、現在では全国で約70団体が90施設以上を運営し、それぞれの地域でそれぞれの特色を生かしつつ、よりよい支援に努めています。

私たちは、この滞在施設運動の一層の質的向上と、社会的存在としてのさらなる展開を図るために、『私たちの目指すもの』を確認し、今後の運動のよりどころとしていきます。

一、私たちは、滞在施設を、「安心して日常の生活が送れ」、「安全に暮らすことができ」、「安価で利用でき」る施設となるよう最大限の努力をします。

- 居室環境を整え、自由に使っていただけるキッチン、バスルーム、清潔なリネン・寝具類への配慮など、患児の滞在にも対応可能なように、細部に注意を払った滞在施設が提供できるように、可能な限りの努力をします。

二、私たちは、滞在施設を利用する家族ができるかぎり豊かな「家族の日常」を過ごせるよう、滞在施設が『病院近くの第二の我が家』となるよう努力をします。

- 自宅から離れた闘病生活などから来る不安な心に寄り添えるよう、それぞれの家族のプライバシーを大切にしつつ、心のケアにも応じられるシステムづくりに努力します。
- 医療機関・医師・看護師等関係者との連携を緊密にし、家族・患児にとって最もよいお手伝いができるよう努力します。

三、私たちは、こうした滞在施設が、私たちが暮らすコミュニティ（共同体）の日常生活に欠かせない存在として、その認知を広く社会に求めるよう努力をします。

- こうした滞在施設が日本の各地の共同体において、全ての人にとって「日常的存在」となることを目指します。
- そのために滞在施設が人々に広く知られ、かつ国や都道府県、地方自治体、その他公的機関の制度的仕組みとしても認知されるよう働きかけていきます。

四、私たちは、非営利の公益活動として「滞在施設」を運営し、その発展のために努力をします。

- 病気の子どもとその家族など、利用者への支援を、唯一の優先事項とします。
- 市民や企業などからも人的・資金的協力をいただき、安定した運営に努めます。
- 「滞在施設」の質的向上と普及のため、全国の関係者や団体との情報交換・交流を緊密に行い、ネットワーク構築に努めます。
- 外国からの利用者への支援や国際的な基準の研究など、国際的な視野も取り入れるよう努めます。

2006年1月21日

「患者家族滞在施設を担う人材養成・研修」事業検討委員会

委員一覧（敬称略・50音順）

委員長

江口 八千代 NPOファミリーハウス 理事長 /
独立行政法人国立病院機構 下志津病院 看護部長

委 員

梅澤 淳 千代田区社会福祉協議会 地域福祉課長
大藤 佳子 NPOラ・ファミリエ 副理事長 /
愛媛県立子ども療育センター 小児科医監
大野 寿子 メイク・ア・ウィッシュ・オブ ジャパン東京本部事務局 事務局長
菊田 洋子 パンダハウスを育てる会 運営委員長
坂本 文武 ウィタン アソシエイツ株式会社 取締役
徳永 和夫 福岡ファミリーハウス 代表
長瀬 淑子 公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン 事務局長
中村 信夫 財団法人がんの子供を守る会 事務局長
松尾 忠雄 NPOスマイルオブキッズ 理事 / よこはまファミリーハウス 会長
山本 佳子 パンダハウスを育てる会 代表

オブザバー

西岡 由美子 アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）広報部
三浦 耕太郎 伊藤忠テクノソリューションズ株式会社 CSR・コンプライアンスチーム
山崎 紀徳 ソフトバンクテレコム株式会社

スタッフ

岩部 敦子 / 植田 洋子 / 小山 健太 / 知久 佳子 / 和田 千尋

2010年3月発行
編集／発行 特定非営利活動法人ファミリーハウス

〒101-0031 東京都千代田区東神田2-4-19
TEL : 03-5825-2931
FAX : 03-5825-2935
E-mail : jimukyoku@familyhouse.or.jp
URL : <http://www.familyhouse.or.jp>
イラスト：江村 信一
デザイン／印刷／製本：株式会社 オリコム

